
DESPEDIA

黒葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

DESPEDIA

【Nコード】

N1089H

【作者名】

黒葉

【あらすじ】

文化祭委員になった俺と渚は、居残って仕事をしていた。そんな日に限って、日が落ちるのが不自然なまでに早い。早く帰ろう。仕事を終えて帰ろうとしたとき、「それ」は現れた。目が覚めて、俺がいた場所は廃墟。そして、妖艶に笑う着物姿の渚。「あら、起きたの？」

DESPEDIA - 1

鏡は見た物を正確に映す。どんなに醜くても、どんなに美しくても。区別なく、正確に。

見たものの姿、行動を違わず映す。差異なく完全に。だったら、誰も見ていない鏡にはなにが映ってるんだろうね？」

リーダーって言うものは基本的には厄介な役職だ。重要な仕事しか回ってこないし、失敗すれば必然、ひどく叩かれる。

だから、そんな役職をやるのは運のない奴か、よつぽどのお人よしか、どっちかだろう。少なくとも、自分からやる奴なんていないと思っていたのだが。

数日前の出来事を思い出す。文化祭のクラスリーダーだけが決まらず、ぐだぐだとした雰囲気の流れで澱んでいた教室。そんな中、くつくうと寝息を立てていた彼女は、ふと覚醒すると、今の状況を隣の席の奴に聞き、何事が言葉を交わして頷いていた。

そして、他にやることもないのでその様子を眺めていた俺に、大輪の花と見間違っほかに可愛い笑顔を向けてから、シュビツ、と勢いよく拳手をして声も高らかに宣言したのだ。

「私と、夕風くんがリーダーやります！」

正直、彼女がリーダーに立候補するであろうことは笑顔の時点で確信していたのは間違いないのだが、そこにまさか俺が含まれるとは、皆目見当すらつかなかった。

夕風……一ノ谷夕風とは、間違える余地が猫の額ほどもなく俺であつた。

さて、この宣言に教室内の鬱屈とした空気はなかったかのように雲散霧消、わざわざしてくれた立候補、自分じゃなければ誰でもよしと言わんばかりに、とぼっちりの俺に確認をとることもなく、俺

と彼女がクラスリーダーの職を得ることになったのだった。

君子危うきに近寄らず、という言葉があるが、彼女はそれの対極を歩み、危うきあれば突撃せよの精神なのであった。

その精神を彼女は遺憾なく発揮して、俺達は学校全体のリーダーの職までゲットしてしまっている。今やってる仕事も、全体の仕事であり、手が抜けない。

「しかし、九月だと言うのにもう真っ暗とはこれ如何に」

各クラスの出店票を整理しながら俺は呟いた。まだ六時半だと言うのに、四階の我がクラスの窓から見える景色は漆黒だった。

秋の日はつるべ落とし、というがこの日の落ちっぷりは半端ではない。

こう暗くてはもう帰りたいのだが、整理中の出店表がそれを許さない。これを読んで、大まかに教室配置だけはしておかないと、全ての作業が大幅に滞ることになる。この仕事の担当は俺ではなく彼女なのだが、ご本人は俺の膝でくうくう寝息を立てている。

彼女。ごく普通の女性を呼ぶときの人物代名詞。または付き合っている女性のこと。俺の発言の意味を言えば後者になる。彼女をフルネームで言うならば禅樹渚。奇特定の苗字だが、割と古い家だかららしい。渚の見た目は、もう、すごく可愛い。素晴らしい。優しげな瞳とか、ちょっとたれ目な綺麗な目。小さくて整った耳。つやつやの唇。ほんの少し赤っぽい柔らかいほっぺた。髪は肩にかかるくらいの長さで、薄い茶色。最高級の絹のような、いや、それ以上にサラサラで、金糸の様。もうべたばれなのだ。

そんなわけで、渚の言うことならば、はいはい従ってしまうのである。

うにうにとか、意味もない声を上げて寝ている渚の頭を撫でながら、黙々と出店表整理に精を出す。割と重要な位置にある出店表だが、裏に落書きがされていたりしている。重要と言う認識が足りていない。大丈夫なのか？

そんな事を思いながら、整理完了。

「終了ッ！コングラッチュレーション！」

「れいしょん」

終了の叫びは、二人でだった。

渚は何もしてないでしょ？

「おはよう、夕風くん」

ぴょこん、と彼女は跳ね起きて、ポケットから漆塗りの黒い鏡を取り出して、寝癖チエックを始めた。

「おはよう。いい鏡持ってるな」

「このまえ蔵で見つけたの。なんか、高級そうな箱と紙に包まれてた」

「ふーん。まあそれは置いといて。暗くなったらし帰るよ」

わかったよ、と渚は後ろのロッカーに荷物を取りに行った。軽くなつた膝が少し寂しい。とは言ってももう七時。外は漆黒。

流石に校内に残っているのは宿直の先生くらいだろうか？

見つかると厄介だな。

そんな取りとめもないことを考えていると、後ろから肩を叩かれた。渚か。

「準備でき……」

言葉を発することが出来たのはそこまでだった。強制的に、何者かに体の支配権を奪われたように、声が出ない。いや、声が出せない。

意識が濁る。精神が揺らぐ。

混濁する俺の目に映っていたのは、意識が落ちる前に何とか俺が見たのは、白い、シロイ、紅い、アカイ、黒い少女。

DESPEDIA - 2

「なあに、姉さん。退屈だからって、謎々遊び？いいよ。付き合っただげる」

そう言っで、私は花の水を変える手を止めて、姉さんに振り向いた。洋風の、べつど、という寝具に横たわっている姉さんは、薄く白い着物を着ていて、そのまま棺桶に入っでいけそうだった。

「違っわよ。鏡っで、不思議なものでしょ？神様が宿っでいたり、悪霊を封じたり、色々出来る。私達の姿だっで映す。だから、誰も見ていない鏡には何が映っでいるんだろっで、思わない？」

顔の左半分を包帯で覆った姉さんは、それでも綺麗に笑っで言っでた。大式本帝國曆XXXX年の文明開放以降、神やら悪霊やらの迷信は消え去り、洋風文化がこの国を侵食しているのだが、帝國首都より遠く離れてるこの地では、まだそんな風潮は微塵も知られておらず、侵食されてないようだった。

唯一入っできた洋風文化と言えは、この建物。ええっで、ほすびたる（？）のみ。ここを出れば、文明開放以前そのままの風景が広がっでいる。

帝都から戻っできた私は、向こうに居たのがたっでた三年とはいえ、この風景には何とも言えない、違和感と言っでたらおかしいけど、もどかしさ？のようなものを感じてる。

生まれたときから、時が止まっでいるかのようにな何も変わらない故郷。郷愁に欠片も吹かれないのは、何も変わらないからなのかもしれない。

「どうしたの？」

私は姉さんの問いに、薄い笑みで答えた。ぼんやりしているように見えたんだろっで。考えが横道にそれたせいだ。

「それで、どう思っで？」

姉さんは再度私に尋ねた。

興味もないことなので、大して考えず、口に答えを任せた。

「さあ、分からないわ。鏡の神様にでも聞いたらどう？」

「そうね、それが一番ね。この病気を治したら、村の神降ろしの人に聞いてみないとね」

私のぞんざいな返しに、姉さんは名案を聞いたかのように喜んだ。各地では神降ろしの人はイカサマ師として次々に追放されているのだけれど、姉さんもこの地域に住んでいる人も、そんな事は露とも知らない。

「でも待ちきれないわ。神降ろしの人をここに呼ぶわけにもいかなしいし」

「そんなに気になるなら、鏡をあげるから、姉さんがどうかして確かめてみればいいじゃない」

どうやって？私は言いながら心の中で笑った。誰も見ていない鏡がどうなっているのか、見るのは不可能だから。矛盾してしまうから。

それでも、私は姉さんに帝都で買った漆塗りの朱色の手鏡と黒色の手鏡の二つをあげた。

姉さんは朱色の方をとても気に入って、毎日毎日眺めて、鏡に自分を映していた。姉さんは顔に包帯を巻いていたとしても綺麗で、あげた手鏡と、櫛でその長い髪を梳いている姿を、うっかり構えず見てしまうと、妹の私でも思わず赤面してしまうほどだった。

本当に、綺麗。

本当に、××ばいいのに。

私はいつも思っている。

姉さんなんて。

本当に。

×ねばいいのに。

DESPEDIA - 3

鏡に神様が宿るなら。私の願いを叶えて頂戴。
鏡に悪霊が宿るなら。私の願いを叶えて頂戴。
何時も何時も貴方を覗く、私の姉さんを×して頂戴。
何時も何時も貴方に映る、私の姉さんを×して頂戴。
いいじゃない、どうせ姉さんは病気なの。
いいじゃない、どうせ姉さんは治らない。

ずいぶんと埃っぽい空気だ。何年掃除をしなかったら、これほど埃がたまるのだろうか。

「姉は血を吐き涙を流す、
ひとり地獄に落ちゆく姉よ、
地獄くらやみ花も無き。
鞭で叩くは妹か、
鞭の朱総が気にかかる。
叩けや叩きやれ叩かずとも、
無間地獄はひとつみち。
暗い地獄へ案内をたのむ、
金の羊に、鶯に」

近くで声が聞こえる。渚の声によく似ているが、金属質のような、冷たい音がノイズのように混じっている。

「皮の囊にやいくらほど入れよ、
無間地獄の旅支度。
春が来て候林に谿に、
暗い地獄谷七曲り。
籠にや鶯、車にや羊、
可愛い姉の眼にや涙。

啼けよ、鶯、林の雨に
妹恋しと声かぎり。

啼けば反響が地獄にひびき、
狐牡丹の花がさく」

何とも物騒な歌だ。立ち上がろうと腕に力を入れると、鈍く痛み
が走った。

「地獄七山七谿めぐる、
可愛い姉のひとり旅。

地獄ござらばもて来てたもれ、
針の御山の留針を。

赤い留針だてにはささぬ、
可愛い姉のめじるしに」

歌は続く。俺は痛みを押し切り、立ち上がった。

「あら、起きたの」

半分残骸のような椅子に座ってこちらを見ていたのは渚だった。
けれども、普段の渚とは違い、冷たい眼と、暗い雰囲気を持ってい
た。

あたりは、さっきまで居たごく普通の教室ではなく、廃墟だと確
信を持って言えるほど、ぼろぼろで、埃っぽくて、机や椅子の残骸、
砕けたガラスや植木鉢、腐った床板、朽ちた土、カビだらけの壁、
極め付けに、窓の内側に無数に打ち付けられた板と御札。

紛れもなく廃墟だった。

割れた黒板や、作りから察するに、学校だったかもしれない。

「いちのたに、ゆうなぎ。でいいのから。わたしもこんなことは初
めてでね」

渚（？）はゆらりと立ち上がった。

紺の制服は着ておらず、代わりに鮮やかな朱色の着物を着ていた。

この、暗く汚れた廃墟で、朱色の着物は異様なまでに眼に入る。

一種誘蛾灯のようだった。

「渚？」

俺は訝しげに彼女を呼んだ。今の状況と相まって、俺の頭は混乱し切っている様だった。

「違うわ。わたしは上月よ。渚じゃないわ、ゆうなぎ」

「こうづき？渚じゃない、のか。ここはどこだ？何なんだ？お前は誰だ？」

上月と名乗った女性は、どう見ても渚にしか見えなかったが、目つきや雰囲気、声の質は違っていた。

まるで、何者かが乗り移っているようだ。

「ふふふ、混乱しているわね、ゆうなぎ。これは夢よ。一時のまどろみに現れる泡沫の世界。何も心配はないわ。落ち着きなさい」

上月と名乗った渚はくすくすと笑いながら言った。

このリアルさは夢とは思えないが、ひとまず俺は上月の言うことに従うことにする。

本当に、わけが分からない。目の前だけを見つめよう。

上月を信じるなら、これは夢なのだから。

「とりあえず、ここから出たらどうかしら。ここから出る頃には、あなたの夢も終わるんじゃないかしら」

「言われなくても、こんな廃墟からは、一刻も早く出たい」

上月は相変わらず、くすくす笑いながら「そうね」と同意した。

とりあえず、この部屋を出る。

元はスライド式の木の扉は、腐食して半分に割れ、半ば床にめり込んでいた。

廊下も大体教室と同じような感じだった。やっぱり窓の内側に板が打ち付けられ、外は見えない。おまけに御札が何枚も、乱雑に貼り付けてあった。不気味だ。

「何かをここに封印でもしているのか？」

御札を一枚はがして見てみると、達筆な字で「急々如律令」と書いてあった。なんと読むのだろう。俺の知識にはなかった。

「さあ？」

上月は気のない声で答えた。

一番端の部屋から出てきたので、廊下が続く方に歩く。

途中の部屋も覗いて行ったが、特にこれと言って変わったことはない。どこも変わらずぼろぼろだった。

時折碎ける床板に気をつけながら探索していく。なかなか長い廊下だ。目測三十メートルは歩いたが、まだ先二十メートルほどある。

「長いな」

「そう？」

上月は、意味のない会話には乗ってこないようだった。なんとも淡泊な女だ。

結果、ぎしぎしと床板がきしむ音だけが響く。

こういう無機質な音でも、場の雰囲気と合わせると、なんとなく怖くなってくる。それを会話で紛らわせようとしたのだが、上月が乗ってこなければそれも出来ない。一人でべらべら喋るマネは出来ないし、馬鹿みたいだ。

「やっと端ね」

端まで来たが、突き当たりに部屋があるくらいで、特に何もない。俺は御札をはがして、紙飛行機にして飛ばして気を紛らわせた。

「この部屋、理科室みたいよ」

上月が指差した入口上部に木の札がある。朽ちかけているが、墨で書かれた字は読めた。

「入る？」

上月が楽しそうな声で俺に聞く。こいつは本当、なに考えているのかさっぱりだ。

目線で答えて、俺と上月は理科室に入る。

理科室は、他と比べるとまだ原形を保っていた。それでも、アルコールランプや、人体模型の破片が散らばっている。

「気をつけるよ」

思わず声が出た。上月はぽかんとした後、不自然なほどにこやかに笑った。

「ありがとう、ゆうなぎくん」

「嫌がらせか、上月」

渚そつくりだった。こいつは性格が悪すぎる。見た目は渚なので、精神に大ダメージだ。

思わずくらりときた。こうかはばつぐんだ！と言ったところ。

「嫌がらせだなんで、ゆうなぎくんひどい」

「お前のほうがひどいわ」

急激に疲れを感じて、俺は幾分マシな状態を保っている机に座り、ため息をついた。

「疲れたの？」

「誰かのせいだね」

上月はごそごそと物音を立てながら、理科室中を漁っていた。

俺はその様子をただなんとなく眺めていた。

「何もないわ」

「何があるって言うんだ」

確かに、何を求めて理科室に入ったのだろう。理科室を出る。

「階段も、梯子も降りるための物は何もわね」

「降りようがないな。」

廃墟から出るとはいったものの、もう壁にぶち当たってしまった。やりきれない。

「とりあえず、隈なく探してみたら？」

「何も変わらないだろ」

上月はむつと顔を歪め、次の瞬間にさっきと同じ嫌な笑みを浮かべた。

「お願い、ゆうなぎくん。もう一回しっかり探してみようよ」
渚そつくり。

上月はこういうやつだった。

それで動く俺も俺だった

DESPEDIA - 4

鏡に映った人間と、覗く人間は同じではない。

性格という意味ではなく。

容姿という意味ではなく。

存在という意味ではなく。

鏡は、現実しか映さないから。

必然、見たくないものしか映さないから。

覗く人間が、映った人間を否定する。

だから、同じではない。

姉さんの病気は緩やかに進行していく。

緩慢に近づく姉の死は、私には待ち遠しいものだった。

姉さんの顔を覆う包帯は大体一週することに、その面積を拡大していた。

左半分を完全に包帯で覆った姿の姉さんは、それでもまだ

綺麗だった。

見た目だけは。

姉さんは、私が居ることにも気づかず、私のあげた鏡を必死に見ていた。その姿には、切羽詰った狂気が浮き沈みしている。

私はそれを見て、唇を歪めて冷笑する。

惨めね、姉さん。

鏡を覗き、映った自分を否定して鏡から目を逸らし、少ししてまた鏡を見る。姉さんの最近の一日はそれで過ぎて行っていた。

この病気は、こんな症状を引き起こさない。

単純、姉さんが弱いだけ。

そう思うと、笑いがこみ上げてくる。

姉さんは、弱い。

私が姉さんの所に行くのは週初めと真ん中、終わりの日。

特に初めの日は、包帯がどれだけ増えているのかが分かるので楽しみだった。

緩やかに増えていく包帯。

死の印。

壊れていく姉さん。

楽しい。嬉しい。

けれども、最近は包帯が増えない。むしろ減ってきた。

姉さんも、また私と話してくれるようになった。

何で？

何で何で何で？

何で？

姉さんが笑いかけるときに、私の心は荒れ狂った。

姉さんは弱いのに。

包帯は減らないはずなのに。

増えていくだけのはずなのに。

初めのうちはたまたまだと思った。そういうこともある、と。けれども今では、包帯は左目のあたりを隠すのみ。

これではここに来たときより少ないくらいじゃない。私はイラついた。

「もうすぐね、治るかもしれないって先生が今日教えてくれたのよ」「本当？よかったね、姉さん」

「うん。これも、上月ちゃんがいつもお見舞いに来てくれたおかげよ」

「そんなこと、ないよ」

「ううん。そうよ」

姉さんはそう言って、やっぱり綺麗に笑った。

私は耐え切れなくなって、その日姉さんにしばらく帝都に戻ることを言って、次の日帝都に向かって出発した。

DESPEDIA - 5

「どうしようもないな」

おそらく階段があるであろう場所は、板によって封鎖されていた。隈なく探した結果、理科室脇の壁が他の腐った木の壁と比べて、不自然に形を保っているということに気づいた。

叩いてみて、どうやら向こう側があることが分かった。まではよかったのだが。

どうやっても壊せない。何枚かの板を重ね合わせているみたいだ。「この封鎖を、どうにかしないといけないわね」

上月は、こちらをちらちら見ながら言った。

「もうやらんぞ」

痛む肩、足をさすりながら俺は返した。

さっきまでタックルさせられていたので、体が痛い。

椅子をぶついたりもしたのだが、残骸をぶつけても意味がない。

活路はあれども、通れず。

「なんとかしないとな」

また理科室に入る。

「何もないんじゃないの？」

上月は自分が部外者のような感じで言った。

「理科室なら、マッチ位はあるだろ。焼く」

「へえ、焼死がお望み？」

上月はそう言いながらも、探すのに協力してくれた。

「大丈夫。いざとなったら、体で消す。それに、そこまで一気に燃えるものでもないだろ」

正直、自分でもどうだか、と思っているのだが、上月は特に反論せずうなずいた。

しばらく探していると、マッチの小箱を見つけた。

「あつたぞ」

「こつちもいいもの見つけたわ」

上月が持っていたのは、瓶入りのアルコールだった。

「少しは燃えやすくなると思うわ」

準備は出来た。

不安がないわけじゃない。むしろ不安しかないが、板の前に立つ。

失敗したら大惨事。焼死コース。成功したら、下に。

それにしても、上手く周囲の壁に偽装してある。

ここは、どんな所だったんだろうか。封鎖された窓。御札。朽ちた椅子や机も、時間が壊す前に人が壊した後があった。植木鉢も投げ込まれたものだろうし、極め付けに降りられないよう、封鎖された階段。

どこからどう見ても、怪しい建物だ。

「早く、やってみましょ？」

上月は、瓶の中のアルコールを、全て板にかけてしまっていた。

「マッチを貸して？擦りたいわ」

言う通りに上月にマッチを渡す。

十本程度のマッチが入った小箱を持って、上月がマッチを擦る。

「あ。折れちゃったわ」

どうやら、脆くなっているらしい。大丈夫か？

「……もう。ゆうなぎが擦って」

三本ほど折って、上月は俺にマッチを返した。

一本擦ってみるが、あっさりと折れた。

「相当脆いな」

「でしょ？」

上月はなぜか嬉しそうだった。

次々と折ってしまつて、後一本。

「マッチを擦るのが、こんなに難しいと感じたのは初めてだ」
擦る。

何とか成功した。小さな火が、指先で輝いた。

俺はそのまま、マッチをアルコールで濡れた壁に押し当てる。

「っ！」

火が、炎となる。

瞬く間に火が燃え広がり、一瞬にして、封鎖していた板のみ燃える。

嘘の様な光景だった。

正確無比に、一瞬で、板のみが燃え尽きる。

灰も、残骸も残らず。

思わず、呆然となる。

「ゆうなぎ？」

上月に呼ばれて、ようやく我に返る。

今のは、一体何なんだ？何から何まで、怪しく、妖しい建物だ。板が燃えた後には、確かに階段の手すりが見えていたが。

「壊されているわね」

木造だったろう階段は、手すりのみを残して、完全に壊されてしまっていた。

これでは、降りることなんて出来ない。手すりだって、ぼろぼろだ。

ためしに握ってみると、あっさり砕けた。

「一難去って、また一難」

思わずつぶやいた。下に飛び降りるのは、この廃墟では危ない。床板が崩れるから。

「また探索ね」

「いや、確かカーテンがあっただろ。あれを繋げて降りる」

言うてから思う。中々いいアイデアだ。

口をついて出てきた言葉だが、悪くはない。

マツチの空箱を放る。さっき、御札で作った紙飛行機の近くに落ち、転がっていった。

早速カーテンを集めに行く。

どこの部屋のカーテンも汚かったが、逆に言えば汚いだけだ。

最初の部屋まで戻り、カーテンを集める。

「これだけあれば十分ね」

上月と俺の両手は、カーテンで一杯になっていた。

「え？」

部屋から出たとき。

階段のあたりに、人影が見えた。

「どうしたの、ゆうなぎ」

「そこに・・・」

消えた。どれだけ眼を凝らしてもいない。飛び降りた？音は？

「なんでもない」

なんだったんだろう。

幽霊？見間違い？

カーテンを抱えて、階段まで戻る。そこで、見つけた。

踏まれた、紙飛行機。

マッチを放ったときには踏まれていなかった。

カーテンを集めに行くときも、俺も、上月も踏まなかった。

じゃあ。

誰が。

踏んだ？

文明開放からしばらくして、政府はいまだ過去の風習・文化を維持する地方にも洋風文化を普及させることを決定。

他国に自国の発展度を見せるために行われた政策だが、それが元でとある地方では暴動が起きたという。

なんとか下に降りることは出来たが、どうやら俺たちの他に別の人間がいることが分かった。しかし、同じ階にいたのに、どうして最初見つけられなかったのだろうか。

疑問は尽きず、解決策はない。

「渚の笑顔でも見たいなあ」

渚。ああ渚。いつまでも、どこまでも一緒にいたい。

「そう、一緒にいたい。いつでも、どこでも。でも、勘違いはなしだ。何も裏はない。誓ってない。本当だ。嘘じゃあない。渚に嘘をついたことが一度でもあった？いいや、ないはずだ。当然だな。誠実。それは心の奥底の奥底、魂の根本の根本から、好きで、好きで愛して、愛して、愛しすぎている人に対するとき、必然的に身につくものだ。その人の前で誠実じゃないのだとしたらその愛は偽り。または裏があるに決まっている。しかし！俺はどうだ？ラブ・マックス。もちろん俺は渚を愛している。愛する渚に嘘はつけない。俺が君に言う言葉は全て真実だ。ああ渚、片時も離れたくないのに、今の状況はどうだ！渚さえいればこんな状況でも、どんな状況でも絶対平気なのに」

「ゆうなぎ、気が狂うのはせめてここから出た後にしましょ」

上月が呆れたように言った。

俺はそんな上月を、正面からじっと見つめる。

「な、なあに？」

上月は照れたように、着物の袖で顔を隠した。

「ふっ。やっぱり、見た目が渚でも心が違えば魅力はガタ落ちだな。何故ならば、そう！俺は渚の心と体の両方を等分に愛しているから、俗な愛じゃない。真実の愛。ラヴなのだから」

「現実逃避もそこそこにしなさい」

上月はぺしんと俺をはいた。仕方がなく、ギアを変える。

「また、降りるための道を探さないといけないわね」

降りてすぐの場所にも階段があったが、途中で煉瓦の壁が出来ていた。壊そうとするまでもなく、無理だと判断した。

この階の廊下も、上の階とほとんど同じ。けれども、上の階に理科室があったことから、同じ場所に特別教室があるかと思ったのだが、真正正銘の壁しかなかった。変わった作りだ。

さっきと同じように探索していく。部屋……いや、学校だったことは明白だ、教室内は、上の階より荒れていた。

この調子だと、下はもつと酷そうだ。

「ゆうなぎ、ゆうなぎ」

上月が廊下から俺を呼ぶ。教室内で碎け散った黒板を眺めていた俺は、上月の所へ行く。

「足跡があるわ。わたしたち、まだ、あっちには行っていないのに」
見ると、積もった埃に足跡が浮かんでいる。確かに、誰かが歩いて行ったようだ。

「ゆうなぎが見た人ね、きつと」

上月は楽しそうに言った。

「追ってみよう」

教室の探索を打ち切って、足跡を追う。教室には入らず、直線で続いていく。

俺が見た人影と足跡がイコールなら、どうやって下に降りたのか。同じルートを使ったにしても、まったく音がしないのはおかしい。

俺たちだって、カーテンをロープ代わりにしたが、それなりの音を立てた。

そろそろ真ん中、という所で足跡はぶつつり途切れた。

「そんな、バカな」

どこかに上る場所もない。そして、この先にはなんら変わった所はなく、灰色の埃の絨毯が広がっているのみ。

「そうだ、始まりは、どこからだ」

慌てて今来た廊下を引き返す。

足跡の始まりは、俺たちが追い始めた教室前から唐突に始まっていた。

「そんな、バカな」

足跡どおりなら、ここにいきなり現れて、さっきの場所でいきなり消えたことになる。

そんなわけがない。そんな芸当が、できるわけがない。

「上月、どういうことだ？」

「わからないわ」

上月は人事のような反応を返した。全く、おちよくっているのだろうか。

「埒が明かない。足跡の先に行こう。教室の探索は後回しだ」

また、戻る。足跡を追っていった廊下。行きと戻りで、四つの足跡が埃の上に刻まれている。

四つ？

「おい、あの足跡が消えてるぞ」

初めに追っていた足跡は、綺麗さっぱり消えていた。

唇をかむ。

どうなっている。

頭がどうにかなりそうだった。

「とりあえず、向こうの端まで行く」

上月は無言。けれども顔は笑っている。

ため息をついて、歩みを再開。

やっぱり何者かの足跡は消えており、俺と上月の足跡のみ残っていた。

「ここは、窓ガラスが生きているな」

「本当ね。板も、外側に打ってあるわ」

足を止めて、二人で窓を見る。窓の向こうから、俺と上月がこちらを見ていた。

「鏡みたいね」

「そうだな」

窓の向こうの俺は苦々しい顔をしていた。反面、窓の向こうの上月は穏やかな表情だ。

「行こう」

また、歩き始める。

半分までくる。今度は、さっきまでは埃が一面に積もっていた廊下の真ん中に、足跡が出来ていた。

不可能だ。戻るときも、時折後ろを振り返った。誰も、何も見ていない。どうなっているんだよ、本当に。

「帰ったら、渚に思いつきり甘えよう。そのぐらいしないと、ここでの不幸と釣り合わない」

「ふふふ、わたしに甘えてもいいわよ？」

「浮気はしない」

真ん中より、向こうに足を踏み出す。

得体の知れないものが歩き回っているこの階。

こういう恐怖には、慣れない。

無言で廊下を進む。窓の方を見ると、向こうの俺もこちらを見る。やつぱり、苦い顔。

足跡は、向こう端と真ん中の中間あたりでまた途切れた。

もう、本当に考えるだけ無駄だ。

「ドラキュラでもいるのか？足だけ出して、他は闇に」

「フラド・ツペシュ？いるわけないわ、彼は外国人よ」

俺のぼやきに、上月が反応する。

「誰だ、それ」

「フラド三世。1431年から、1476年。通称、ドラキュラ公

または串刺し公。ツペシユとは、串刺しの意味。1460年頃から、串刺し公と呼ばれ始める。ドラキュラの元となった人よ」

上月は得意そうに話した。

「詳しいな」

「帝都一の外国学者はわたしよ、ゆうなぎ」

よく分らないが、上月は誇らしげに言った。

ドラキュラ談義をしていると、端が見えてきた。

この階の特別教室は、図書室。

中は、酷い有様だった。両方の壁は大きくガラス張りで、生きてはいたが外から板を打ちつけられていた。本棚はひっくり返ってなお壊され、本は床板が見えないくらいに散らばっている。唯一まとも立っているのは、扉のガラスが全て砕けた棚ぐらいだった。後は、全て倒壊。

強い地震の後でも、こうはならないだろう。

気が引けるが、本を踏みながら中央あたりまで進む。そこより奥は倒壊した本棚の森だった。

「酷い有様だな・・・」

上を見ると、天井にも穴が開いていて、上の階の床板？が見えた。今まで見た中で、紛れもなく一番の崩壊っぷりだった。

「ゆうなぎっ！後ろ！」

上月が鋭い声を出す。それと同時に物音。慌てて振り返ると、狂気の形相の、着物を着た女が本を蹴散らし俺に向かってきていた。

「うわあっ！」

女は俺の顔に手を伸ばす。

それを反射で動いた腕で受け止める。それでも女は速度を緩めず、ぶつかる様に俺と密着する。

「顔！顔！お前の、顔を、私に、寄越せえ！」

大きく見開いた、血走った眼と、ガチガチと鳴らす歯。

女性とは思えない剛力に、受け止めた腕に食い込む女の爪。

女というより、鬼だ！

「顔だ！顔だ！お前の顔がほしい！」

叫びながら、いつそう増す力。

こちらも全力を出す、足元にも及ばない。

「上月、助けてくれ！」

鬼の背後にいるはずの上月に、助けを求める。ヒヒ、ヒヒとヤバげな笑いをしながら、鬼は俺を追い詰めていく。

「ゆうなぎ、あたっても怨まないでね」

場違いなほど落ち着いた声で、上月は言った。

意味を考えるまでもなく、理解した。

「ぐげっ」

醜い声とともに鬼は俺を突き飛ばして顔を覆う。

上月が投げた辞書が顔に当たったのだ。

「助かった、上月」

俺は慌てて上月と合流する。

「どういたしました。今のうちよ、ゆうなぎも投げて」

言いつつ、上月は二冊目を投げる。鬼の足に命中。

確かに、気絶くらいはさせておかないと、危ないかもしれない。

俺は足元の辞書を拾い、投げた。

「ぐっ！」

ちょうど、鬼が顔を上げたところに命中。

同時に、何かが崩れるような音がした。

床板か？

「ああ、ああ！顔、私の、顔！」

こちらを睨み付ける鬼の顔は、酷かった。

左半分、ほとんどない。

壊れた人形のようにも思えた。なんてアンバランス。

鬼の足元には、義顔とでもいうのか、顔を形作っていたものが壊れて転がった。

「かああああおおお！」

咆哮。あまりの迫力に、全てを忘れる。正に、野獣の咆哮。

「ゆうなぎ！」

上月の声を聞くのと同時に、背中に衝撃。

「があっ！」

唯一無事に立っていた、あの棚に押し付けられたということは、一瞬遅れて理解した。

「顔、寄越せえ……」

半顔で俺に迫る鬼。さっきとはまる違う、強大な力。押し付けてなお、棚を倒す勢いで俺を押ししてくる。

「くそ、う……」

悪あがき。思いつきり、鬼の足を蹴り飛ばす。

それは悪あがきに収まらず、有効打撃になった。鬼は再度ひるみ、俺を解放する。

俺は距離を取ろうと、入口に逃げるが、鬼は逃がさず、また組み付いて、押してくる。

「あがつ！」

鬼の力にあがらいきれはすもなく、今度は壁に押し付けられる。頭がガラスにぶつかり、意識にノイズが走る。

「顔、貰ったああ！」

がばつ、と鬼が顔を上げ、俺の顔を直視。そして、腕を伸ばす。しかし、その腕は顔ではなく、ガラスを叩いた。なんとか顔を逸らしてよけたのだ。

「あ、あ、あ、鏡、鏡！」

突然鬼が怯えだす。なんだ？

せつかく捕まえた俺を、鬼は放り出し、無茶苦茶に暴れ始める。

「ゆうなぎ、一旦逃げましょ」

上月は駆け寄ってくるとそう言い、手を引いて図書館から俺を連れ出した。

「あああああああ！」

廊下の、真ん中あたりまで下がったが、いまだ鬼の咆哮と、暴れまわる音が響く。

情緒不安定すぎだろう。痛む腕をさすりながら思った。

「竜胆」

ぽそ、と上月がつぶやく。

「りんどう？」

「え？聞こえたの？」

上月はこちらを見た。いまだ鬼の暴れる音が響く。

「あの、女の着物の柄よ。竜胆だった」

上月は図書館の方を向いて言った。

その顔は、暗い笑みをたたえていた。

DESPEDIA - 7

帝都は、異貌に厳しい。

ちようど自分の家に戻って、一息ついたところで、騒ぎ声が聞こえた。

窓からのぞくと、腕が片方無い人が、群集に襲われていた。

やれやれ。あの程度、放っておけばいいのに。

私はふらりと家を出て、騒ぎの現場に向かう。こう煩くては、落ち着くことすらできない。

私が人垣に近づくと、ざざっと割れる。私は少し、有名人だ。

私はかつ、かつ、と煉瓦を鳴らして襲われていた人へと向かう。その様子を、群集は声を漏らさず見守っている。

「た、助けてくださって、ありがと……」
ぐさり。

「だれか、処分をお願いね」

ここは帝都。異貌には厳しい。

結局、帝都にいたのは一月たらずで、私はまた故郷に戻ってきた。
いた。

姉さんが完治したのかがどうか、気になって気になって仕方なかった。
かった。

戻ってすぐ、旅装も解かずに私は姉さんの元に向かった。

「ああああああ！」

姉さんの部屋がある階に着くと、荒々しい叫び声が聞こえた。

その声は姉さんの病室から聞こえる。完治したので、別の人が入ったのだろうか。

私はのろのろと部屋に向かった。しかし、そこで見たのは、私の期待を大きくいいほうに裏切った。

「姉さん」

叫びを上げていたのは姉さんだった。顔を覆う包帯は、右目がかろうじて出ているくらい。

私は、顔が笑みを作るのを止められなかった。

すぐく、増えてる。死の印。左側なんて、肩まで迫る勢いじゃない。

ああ、本当に。

戻って来てよかった。

姉さんは、前に私が笑みとともに見ていた、壊れていた時期と同じ行動をしていた。

もっとも、鏡を見て、叫ぶ。が追加されていたけれども。

姉さん。

もう、綺麗じゃないね。

長くて、艶のあった髪も、ぐしゃぐしゃ。真っ白だった腕も、荒れ果てて、幾筋もの赤い自傷の後が残ってしまっている。

醜く、哀れ。

今の姉さん。

初めからこんな姉さんなら、大好きだったのに。でも。

綺麗な姉さんがこうなったから、大好きなのかも。

私は、姉さんの叫びに隠れて、思いつきり笑った。

鬼の咆哮が止んだので、恐る恐る行ってみた図書館は、中央に大穴が開いて、床を覆っていた本が階下に落ちて散らばっていた。

鬼の姿は見えない。

「降りてみる？」

「しかないか」

他に、階段は見つけられなかった。

穴の縁に立ち、飛び降りる。

これだけの本が落ちて平気だったんだ、俺が落ちても平気だろうという考えからだが、落ちる最中は床板が砕けるに違いないと確信していた。

だが、床板は砕けなかった。

大きく膝を曲げて、衝撃を緩和。俺は下の階に降り立った。

「ゆうなぎ、受け止めてね」

上月はそう言って、俺めがけて落ちてきた。

何とか受け止め、降ろすのと同時に、上から封筒が降ってきた。気になったので拾い、中を見る。

出てきたのは、カルテだった。

「カルテ？」

患者名、禅樹竜胆。

病気名、侵食症（顔）

この二つが、眼に飛び込んできた。

「ぜんじゅ、りんどう？」

渚と同じ苗字。上月がつぶやいた竜胆。病気はよく分からないが、（顔）から、顔の病気。

さっきの鬼の姿が、半分顔を欠けさせた姿が浮かぶ。

侵食症。何かに浸食され、手術で顔を切除？

「上月、どうということだ？」

「ゆうなぎ、それは」

「教える！」

上月はしばらく黙った後、うなずいた。

「わたしの名前は、一ノ谷上月。さっきの女は、わたしの姉、禪樹竜胆。そのカルテの患者よ」

「一ノ谷って、俺と同じ苗字……さて、このカルテの作成日は文明開放のあたりだ。その人間がなんで」

とつくに死んでいるはずの時代の人間だ。生きていたとしても、すごい老婆。鬼のような、あんなまねは出来ないはずだ。

「姉は侵食症で顔を切った。それでひとまず治った。けれども、その後がまずかったの。政府がね、文明開放を押し進めたの。浸透していない偏狭の地域にもね。当然、その地域の人は反発したわ。神や霊は、その人たちにとっては現実だったから。」

猛烈な反発だったわ。洋風文化は徹底的に壊された。役人が持ち込んだ文化品。唯一の病院。それで終わればよかったのに、終わらなかった。竜胆も、病院で治療を受けたというだけで被害にあったの」

「つらかったのか、上月も」

そう聞くと、上月は「全然」と笑った。

嘘についているようには見えなかったが、強がりを受け取った。

「竜胆は逃げたわ。そして、ここに隠れた。けれども、すぐに見つかったわ。殺されはしなかったけれど、姉さんはここに閉じ込められた。ここが荒れていたり、封鎖されているのは姉さんを閉じ込めるため」

上月は一旦切ってから、口を開いた。

「初めの階で、ゆうなぎはここに何か封じているのか聞いたわね。ここには、姉さんが封じられているのよ」

これで全部。上月は口を閉じた。

俺はカルテに眼を落とす。

色々と経過が書かれた後、完治、とハンコが押されている。

一部の疑問は解けた。けれども、まだ疑問はある。

でも、全部と上月が言った以上、もう教えてはくれないだろう。

俺はカルテを封筒に戻して、封筒を放った。

「行くか」

この階の階段は封鎖されていなかったが、降りた先の扉が閉まっております、南京錠が掛かっていました。

その鍵を探すべく、また階段を上って、戻ってきていた。

「この構造、ある程度は知っているだろ」

「ええ。この階には職員室があるわね」

上月はなんでもないように答えた。知っているなら最初から言えよ。

上月の案内で、職員室へとたどり着く。

「鍵がある場所も知っているわ。取ってくるわね」

上月は職員室の奥へと駆けていく。

取り残される俺。何とはなしに、窓際に向かう。ここも、外に板が打ちつけてあった。

「一ノ谷、上月。禅樹、竜胆。一ノ谷、夕凧。禅樹、渚」

こんな珍しい苗字、そんなにない。だったら、竜胆は、渚の…

「ん？何だ？」

窓際に、キラリと光るものを見つけた。漆塗りの朱色のそれは手鏡だった。

傷だらけだが、鏡は無事だ。俺の顔が映っている。

「ゆうなぎ、取ってきたわ」

「ああ、じゃあ、行くか」

何の気もなく、それをポケットに入れて、上月と一緒に職員室を出て、下に降りる。

「ちなみに、ここ一階よ」

上月が錠を外しながら言った。

一階もやはりぼろぼろだった。もう探索はせず、廊下の真ん中あたりにあるという玄関を目指す。

「真ん中あたりにホールがあつて、その先に下駄箱。変わった作り

よ、ここは」

ホールまでの距離、上月がそう言った。

そして、ホールにたどり着く。

「逃がさないわ。私の顔」

そこには、竜胆が待ち構えていた。

「姉さん」

上月が短く声を出した。

そして、息を吸って、言った。

「姉さん。人の顔は人のものよ。姉さんの顔は、それなの」

「わたしの顔は、半分ない！だから、貰うだけだ！」

「姉さん。無理を言っては、ダメ。しっかりと、自分を見て。どんな姿をしているも。人と違っていても、自分は自分。教えてくれたのは、姉さんよ」

上月の姿がぶれる。気づくと、そこにはどこまでも病的に真っ白で、髪もさえも真っ白な、女が立っていた。

「上月？」

「そうよ」

俺の声で振り向いた上月の目は真紅だった。

「本当に最初、夕風はこの姿を見ているはずだけどね」

先天性色素欠乏。俗に言うアルビノ。上月はそれだった。

「姉さん。これを、あげるから。自分を、しっかり見て」

上月は、俺のポケットから鏡を抜き取り、竜胆に渡した。

そして、竜胆は鏡で自分を見る。

「これが、私なのね」

「そうよ、姉さん」

竜胆は薄く笑った。

「鏡に映った自分は現実。でも私は、理想しか見ていなかった。鏡を見るたび壊れて。上月ちゃんに教えられて助けられて。姉さん失格ね」

「そんなことないわ。姉さんは、何時でも私の姉さんだった」

上月はゆつくりと竜胆の元に歩いて行つた。

「つらかったよね。これから、私が姉さんを楽させてあげる」

そして、上月は竜胆の横に立ち。

その胸に刃を突き立てた。

「死んで」

「上月!？」

俺はあわてて駆け寄ろうとしたが、足が縫い付けられたように動かない。

「そこにいなさい、夕風」

上月の声は冷え切っていた。

竜胆は無言で崩れ落ちる。

「姉さん。わたしは本当にあなたが嫌いだった。

私が望むもの全てを持つていて。完全だった。どれだけあなたを怨んだか。どれだけこの瞬間を待ちわびたか」

言いながら、刃を突き立て続ける。白の髪が、返り血で染まる。
「あなたがここに封じられたとき、わたしもここに潜んでいてね。
殺そうとしたけど返り討ち。四階の亡霊となつたわ。

でも。優秀な子孫がわたしを助けた。四階の亡霊は、一階の悪魔を殺しに降りてこられた」

べつたりと、血に染まつた竜胆に、上月は続けた。

「あなたの、禅樹の家はわたしを養女にして、親と引き離してくれたわね。あなたの遊び係として一ノ谷からわたしを奪った。初めて会ったときからあなたが嫌いだったわ。禅樹上月と名乗るのは虫唾が走った。成人して、すぐ家を出たのはそのせい。わたしは、一ノ谷上月よ」

上月の声には、狂気がにじんでいた。

「わたしは、夕風の先祖。一ノ谷上月。この朽ちた身の先祖でも助けてくれるなんて、いい子孫を持ったわ」

くるり。上月が振り返り、血に濡れた顔をさらす。

壮絶な、黒い笑みだった。

「夕凧。あなたの夢も終わり。最期に、禪樹の娘と付き合うのは止めなさい。これは忠告よ」

「それは、無理だ」

俺は譲れないとばかりに拒絶した。

上月は暗く笑って、「そう」と言った。

「まあ、いいわ。じゃあね、夕凧。あなたとわたしには、同じ血が流れているわ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1089h/>

DESPEDIA

2010年10月10日00時12分発行